

5 錦織寛です。えー、この4月から、聖書学院の学院長という、そういうこともありまして、ほんとに皆  
さんが聖書学院のために、今までも祈り支えてきてくださったことを思いますけれども、ほんとに、これ  
からもまた、ほんとに続けて、今後の聖書学院の歩みのために祈っていただきたい、そういう思いでおり  
ます。今日はこうして大事な年会の聖会の御用をさせていただきますことを、ほんとに、感謝すると共に、  
10 畏れを覚えています。実は、今年の年會に先立ちまして、私は、月曜日、火曜日と、チャーチオブゴッド  
の年會で御用をするようにと呼ばれまして、そしてご奉仕をしました。で、月曜日と火曜日の午前中とご  
奉仕しまして、で、あの、教職者の先生たちを前に御用をするっていうのはとても緊張するわけでした、  
ただ、そちらは終わったらすぐ逃げて帰れるということがありまして(笑)。あの、ですからほんとに、お話  
15 だけして逃げるようにしてこちらに来たわけですけども、今晚は逃げるところがないわけです(笑)。ほん  
とに皆さんが祈りを持って支えて管さていることを思いながら、共にみことばに聴きたいと、そのように  
思います。祈ります。

15 神さま、私たちは今、この大事な年會の中で、あなたの御前にいます。神さま、説教者が誰であるかとい  
うこと、ではなく、神さま、ここにいてくださるあなたを、私たちは見上げています。そしてあなたが、  
この夜私たちに語ろうとしておられるところのみことばを、聴きたいと思います。神さま、私たちはあな  
たのみことばに「アーメン」とお応えし、従いますから、あなたがどうぞこの夜、自由に語ってくださ  
20 いますように。待ち望みつつイエスさまの御名を通してお祈りをいたします。アーメン。

今日、お話しさせていただきます中心のテキストは、この29節のところですよ。もう一度お読みします。  
「主よ、今彼らの脅迫に目をとめ、しもべたちに、思い切って大胆に御言葉を語らせてください。」しもべ  
25 たちに、思い切って大胆に、みことばを語らせてください。原始教会の聖徒たちは集まって祈りました。  
「思い切って大胆に御言葉を語らせてください」と、そのように祈りました。私たちがどこに遣わされて  
いたとしても、何年間牧師として奉仕しているということがありまして、私たちに変わらな  
い祈りは何か、というと、私たちがどこに立つとしても、私たちが思い切って大胆にみことばを語らせて  
30 いただく、ということではないでしょうか。実は、ペテロたち、まあ、その祈りをしたのはペテロ、ヨハ  
ネ、そしてほかの弟子たち、そして教会の人々だったわけですが、ペテロたちはほんとうに大胆であり  
ました。この3章、4章のところ、美しの門の出来事から続く一連の出来事ですけども、このと  
ころを見ますと、このペテロが物怖じすることなく人々の罪を指摘し、「あなたがたはあの命の君を殺してし  
35 まったのだ」というふうに指摘したのを私たちは見ます。あなたがたがこのお方を十字架につけたのだ、  
そして彼らは言うのです、この方による以外に救いはない、私たちを救い得る名はこれを別にしては天下  
の誰にも与えられてはいない！...できたばかりの教会の歩みの中で、あのガリラヤの漁師であったペテロ  
が、何と大胆な宣教を、福音の宣言をしたことだろうか、ということを私たちは思います。そして、脅さ  
40 れられても、神に従うよりもあなたがたに従う方が神の前に正しいかどうか判断してもらいたい！私たちとし  
ては、自分たちの見たこと聞いたことを語らないわけにはいかない！...まあ、ほんとうに大胆な、ですね、  
相手がほんとに、大祭司であったり、その時の宗教的な指導者たちであったにもかかわらず、彼らはほん  
とに何の物怖じすることなく、非常に大胆に語っております。ペテロたちは教会に戻って行きます。け  
れどもペテロそこで確かに、そこで自分たちがどのようなことを言われたのか、また、自分たちが、それ  
に対して自分たちがどのように答えたのかということをお報告するわけですけども、でも、ペテロたちは、

自分たちがそのように大胆に宣言してきたということを決して自慢はしません。「おう、あの、いろいろ言われたんだけどさ、俺ね、言ってやったんだよ、『この方以外に救いはない！』って、バシッと言っちゃったんだよ(笑)、あー、お前たちの言うことと、神さまの言うことと、どっちがいいかあー、さあ！さあ！さあ！判断してもらいてえなって、言ってやったんだ！」ということ、このペテロが言ったかと言うと、何もそういうような言い方はしなかったし、教会もそのところで「おお！私たちは何事にも負けないでこのイエスさまのことを伝えて行くんだあー！」というような、そういう言い方は「しなかった」。教会にとっても、ある意味、危機だったと思います。ここで口を閉ざし、「おとなしくしろ」と言われる言葉に従って沈黙してしまったら、どうなるだろうか。大胆さを放棄してしまったらこれから教会の歩みはどうなるだろうかという、非常に大事な転機に彼らはいました。

私たちは今日、自分自身に問いたいと思います。私たちは「思い切って大胆にみことばを語る」という、その「大胆さ」を失ってはいないだろうか。イエスさまこそが救い主であって、イエスさまにこそが、イエスさまにこそ、私たちの救いがあるのだということを宣言していくということに対して、私たちはともすると、大胆さを失ってしまっているということはないだろうか。「イエスさまを信じたらあなたの生涯が変えられるんだ！」ということ、確信をもって宣言していく、ということに関しても、私たちは大胆さを失っていないだろうか。

この「大胆さ」ということは、...「大胆に」という言葉ですけれども、あの...ももとのギリシャ語のことを、英語の辞書で見えますと、いくつもの意味が出てまいります。「大胆」について、どういうことかという、一つは「確信をもって」ということだ。「確信をもって！」みことばを語らせてください、神さまの語られることばは確かなんだという確信をもって、私たちに、神さまのみことばを語らせてくださいと、そういうことだ。この「大胆に」ということは、他にも意味がありまして、「自慢して」という意味もあるんだというふうに辞書にはあるんですが…。この「大胆さ」ということはどこから来るかという、そのおことばを語られたお方に対する信頼から出て来るでありましょう。私たちがほんとうに「大胆さ」を失ってしまっているとしたら、それはひょっとしたら、ほんとうにそのことを語っておられるお方に対する信頼が、ある意味、揺らいでいるのかも知れない。

また、この「大胆に」という言葉には「自由に」という意味がございます。「自由に！」...それは何か強いられて、その「みことばを伝えないと牧師なんて言えないぞ」とか、「このことばを伝えないと天国に行けないぞ」とか、「みことばを伝えないと罰が当たるぞ」とか、そういうようなことではない。「大胆にみことばを語る」というのは、これは、強いられて、何か鞭打たれるようにして、「牧師はみことばを語らないとダメなんだし。」と言われながら、ほんとうに、いやいやながら、もう、しょうがない、でも私はイヤなんだけど、しょうがないからみことばを語ります、ということではなくて、「大胆にみことばを語らせてください」と言うその祈りの中にあるのは、ほんとうに自由の霊を与えられて、喜びをもってこのみことばを語るができるようにという、そういう願いであった、でありましょう。

またこの、「大胆に」という言葉には、「分かりやすく」という意味があります。聖霊がみことばを語らせたときに人々はいろいろな国の言葉で福音を語った。そしてそこに集まった、ペンテコステの日に集まった人々は、なんて言ったかという、自分の国の言葉で、その弟子たちが福音を語るのを聞いて驚いた、というふうにいる。それは、ほんとうに初めてのようにして聖書のメッセージを自分の母国語で聴く、そして彼らが、ここにイエスさまが救い主だということ、その最初の時、聖霊が注がれた時に、いろいろうな国の言葉で語られている。「ああ、私の母国語が聞こえる…」...分かるじゃないか。…やっぱりこの、祈りの言葉だとか、宣教の言葉ってどうしても母国語で聴けるということに勝つことはないでしょう。…「分かった！」...それは単に言葉が通じるか通じないかということだけではない、ほんとうに私たちが、みことばを大胆に語るということの中で、ほんとうに今そこに生きている人たちに分かる言葉を持っているかどうか。私たちはこの救い主が、私たちだけではない、全日本の全ての人たちの、世界中の人たちを救う

85 ところの、神さまの力であることを知っています。けれども、ともすると私たちは人々の理解できる言葉を持っていない。「思い切って大胆に」... どういうふうに伝わる言葉で語ったらいいのだろうか、そのことに迷いがある。「大胆に語る」というのは、そこにいる人にわかる言葉で、私に福音を語らせてください、そのような祈りであった、でありましょう。私たちを、私たちは本当に「大胆さ」をもう一度与えていただきたい。

90 この夜は、二つの側面からお話をしたいと思っていますけれども、一つ目は「大胆さを失わせるもの」というお話をし、...で、その後、に、「大胆さの回復」ということとお話したいと思っています。

「大胆さを失わせるもの」、私たちが大胆に証しをしていく、それを失わせてしまうものって、何だろうか。一つは「恐れ」でありましょう。弟子たちの心の中にも「恐れ」があつたに違いありません。確かに、ペテロとヨハネは大祭司たちの一族に取り囲まれて、真ん中に立たされて、ほんとにその、... 圧迫をされて、そして、そこで「イエスさまのことを語るんじゃない！」と言われて何回も脅された。まさに、彼らはイエスさまを十字架につけた人々ですよ。彼らを怒らせたなら、自分たちもどうなるかわからない。何の罪でそんなことをするのか、誰がそれを許したのかと人々は弟子たちに対して凄み、また議会の結論として「イエスの名によってかたってはならない」と、そのように言ったのでありました。そして繰り返し、繰り返し、彼らを脅し続けた。二人は釈放されてから教会の皆のところへ帰って、何があつたのかを報告したというのですけれども...。議会でも彼らは大胆に証しをした、... そうだったとは思いますが、このよ

95

100

105 私たちを臆病にさせてしまうもの、大胆さを失わせてしまうもの、二つ目に、それは「安定志向」であり、「自己満足」であります。それは、「今ある状況に満足する」ということです。

あの、ペンテコステの日に三千人の人たちがイエスさまを信じたんです。「三千人」ですよー、いいですよね！「三千人の教会」！で、この、美しの門の出来事が起こった後で五千人の人たちが洗礼を受けるんですよ。それだけで「八千人」じゃないですか！「八・千・人」ですよ！！私たちが 162 の教会を作れた

110

115

120 私たちが、今ある状況に満足してしまう、いや、それなりに、うちは、... その、牧師給も払っているし、とか、それなりに、何とか、教会やってるし、みんな仲良いし、これでまあ、いいじゃないか、というふうにそこで満足してしまったら、私たちはやがて「大胆さ」をうしなってしまう。

ある人が言いました。「教会の中では 99% の人がクリスチャンなんだ。でも教会の外に行ったら、99% の人がイエスさまを知らない。99% の人たちがイエスさまを知らない世界が広がっているのに、私たちは 99% のクリスチャンを前にそれで満足してしまっているとしたら、私たちはほんとうに、神さまからの委託された使命を果たしていくことができるのだろうか。」

125

私たちが大胆さを失わせてしまうもの、三つめは「不信仰」でありましょう。「神さまにもそんなことはできない！」そういう不信仰に私たちが捕らわれてしまうと、私たちは大胆さを失ってしまいます。「どうせこの人は神さまを信じないに違いない。」「この人に言っても無駄だろう。」「神さまだってこの人を救いになることはできない。」そういうような諦めや不信仰は、私たちをおとなしい牧師にしていく。それは、  
130 神さまよりも自分の今までの経験や、自分の挫折や、自分の理論や、自分の理性や...といった、そういう判断基準を重くとらえていく。今まで誰もできなかったし、今までもそんなことは起こらなかったし、これからもずっと神さまだってそのことはできないに決まっている...。きっと今回もダメだ...。今年もダメに決まってる...。だいたい、私には才能がない、賜物がない、...過去を見たり、自分を見たりする。そう  
135 したら、確かに「無理」としか言いようがない。できるはずがない。できるなんて絶対に思えない...。  
この3章のところで起こったことというのは、生まれた時から歩いたことのなかった男が歩けるようになった、という奇蹟でした。生まれた時から歩いたことがない、そんな人が歩けるはずがない。歩けるはずがない...。「その人に信仰があるのを見た」と聖書は言うんですが、だからって、「ナザレ人イエスの名によって歩きなさい」って言って、さあ、その人をグッと引っ張ったら、ほんとうに歩けるようになるかと  
140 言ったら、常識から言ったら、そんなことが起こるはずがない。それが「常識」。でも、同時にそれは、そこに入り込んでいるのが「不信仰」。「常識」は、ないのも困るけれど、でも同時に、私たちが信仰を失ってしまうとしたら、神さまが今もこの世界の中に、この日本に、この教会に働いてくださるとい  
145 い信仰を失ってしまうとしたら、私たちは大胆に福音を語ることができなくなる。「イエスさまを信じたら、あなたも変わるんですよ！」というその信仰を語る側が失ってしまったら、その福音を大胆に語ることはできない。「イエスさまを信じてください！...でも、あなたは難しいだろうな...」「でも、あなたはなかなかい  
150 っぱい問題を抱え過ぎているから、あなたの場合にはちょっと難しいかもしれませんねえー」っていうような、私たちが不信仰に陥ってしまうとしたら、私たちは大胆さを失ってしまう。  
大胆さを失わせてしまうもの、四つ目は「孤独感」ということでありましょう。ひとりで闘っていくのは、やっぱり私たちにはきつい。信仰の友がいて、それで、だから私たちは大胆になることができる。ペ  
155 テロとヨハネと一緒に歩いていて、そして、共に、その...。足の不自由な人に向き合いました。その後、大祭司たちの一族に取り囲まれた時も、彼らは共に証しをしました。そして彼らが釈放されて、まず最初に行ったのは教会のところだった。そして、教会に行って、みんなに報告をしたのでした。彼らには仲間が必要だった。パウロがコリントの町に行った時に、そこで彼はほんとうに心が委縮してしまって、何だか苦しくて、辛くて、たまらなかつた  
160 とコリント人への手紙の中で言っています。でもそんな中で、神さまはパウロのためにプリスキラとアクラを備えてくださった。パウロはだんだん元気になった。あのエリヤが天から火を下して、神さまに祈って天から火を下していただいた時に、でも、あのイゼベルが「エリヤ、お前の首が明日の朝まで載っかっていると思うなよ」と言われて、エリヤは逃げていく。...で、彼が言ったのは「私は独りぼっちだ、神さまを信じてほんとうに生きて行こうとしている、従っていこうとしてきたがもう、私ひとりなんです。私ひとりなんです。」それがエリヤを苦しめた。  
165 今回、あの一、教団委員長になった中西先生は、私の同級生ですね。えー、中西先生が教団委員長になるって、私は思ってなかったんですよ(笑)。ほんとうに、「あー、中西先生が選ばれて良かったな」、総会の時にその結果が出て、そして、ほんとうにそのように思ったことでした。...で、...私が聖書学院で勉強していた時、私にも仲間が何人もいました。いろんな、...中西さんもそうですし、それから、チバちゃんとか、ダンちゃんとか、ケンちゃんとか、ですね、いろんな人たちがいた。そしてみんなそれぞれに神  
170 さまの御用に就かせていただいている。「中西先生は」ですね、あの一、聖書学院時代は「宇宙人」(笑)...  
私たちはカゲで言っていました(笑)。表でも言っていたかなあ(笑)。何で「宇宙人」かと言うと、あの一、国語の時間に「滑舌の練習をきなさい」...まあ、先生に言われたんですね。『「あえいうえおあお、かけきくけこかこ...』っていう具合に言いなさい」...で、あの、みんな、まあ、言われたんですけど、「ああ、そ

うだよね」って言って、大事だよねって、まあ、右から聞いて左に流していた。ところが中西先生は、で  
170 すね、そのことを聞いた次の日からおそうじ、朝の掃除をしながら「あ・え・い・う・え・お・あ・お」  
って毎日やる。...で、同級生はみんなそういう中西先生を「宇宙人だ、宇宙人だ」と言って迫害しました  
けれど（爆笑）、それにめげずに、最後まで、卒業するまでやり抜いた（笑）。えー、私たちの教団委員長は  
そういう、根性のある（爆笑）、人なんです。でも、ほんとに私たちが「ひとりではない」「仲間がいる」  
175 私たちがお互いのために祈ってくれる仲間がいる。教団委員長のためにも祈りたいと思います。遣わされ  
ている私たちお互いのためにもほんとうに祈って行きたいと思います。「仲間がいる」。独りぼっちだと思  
ったらほんとうに辛い。でも、私も誰かのために祈るし、私のために祈ってくれる、そういう人がいっぱい  
いる。

私たちに大胆さを失わせてしまうもの、五番目は、それは「罪」であります。この3章、4章の出来事  
が終わって、5章のところに出てくるのは、あれだけ大胆に神さまの前に出た、その教会が、教会の中に  
180 「罪」の問題が入り込んできたということが、そこには書かれています。それは、ほんとに、献金を献げ  
るという、一番きよい場面で、そしてアナニヤとサツピラはそれなりにまとまった金額を神さまの前に思  
い切って献げたと思う、でもその神聖なる行為の只中に「欺き」が入り込んで来た。教会にとっても危機  
だったと思います。このことをあやふやにしていたら教会は大胆さを失ってしまう。

そのような危機の中であって、教会はどのようにして大胆さを回復して行ったのだろうか。それは、覚悟  
185 を決めることでも、気合を入れることでもなかった。それは、人々が集まって、神さまの前に心を合わせ、  
声を合わせて、祈る、ということでした。この23節、24節のところにはこう書かれています。「ふたりは  
ゆるされてから、仲間の者たちのところに帰って、祭司長や長老たちが言っただけのことを報告した。  
一同はこれを聞くと、口をそろえて、…」この「口をそろえて」というのは、新改訳や新共同訳では「心  
を合わせて」というふうになっていますが、本当に一つ思いになって、彼らは神さまに対して「声をあげ  
190 た」。神さま、どうぞ私たちを憐れんでください...そこで彼らは祈ったのは、自分たちが今、身に起こっ  
ていることは決してびっくりすることでも、不思議なことでもない、今こうして教会に戦いがある、迫害が  
あるというのは、イエスさまにおいてもそのことは起こったし、旧約聖書の時代からすでに語られていた  
ことだ。びっくりすることではない。でも、同時に彼らは祈った。

彼らが祈ったのは二つのことです。一つは、29節「主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い  
195 切って大胆に御言葉を語らせて下さい。」みことばを語らせてください。思い切って大胆に、思い切って大  
胆に何をするかと言ったら「御言葉を語らせて下さい」と、彼らは言った。私たちの願いはまさに、この  
ことです。私たちが預けられているものは、何かの名言集や、哲学の言葉ではない。私たちが預けられて  
いるのは、これを信仰をもって人々が受け入れる時にその人の人生をひっくり返すところの、神の力に溢  
れる、その「神の御言葉」だ。信じる者を生かすところの、神さまの言葉を「語らせてください」。大胆に  
200 語らせてください。それは単に生きる指針を示したり、「こういうふうにと生きて楽ですよ」というような  
ことを伝えたいと思っているのではない。生ける神さまのお言葉を語る...。彼らは、ペテロとヨハネは、  
その、歩けない人に対して、「私にあるものを上げよう』と言い、「ナザレ人イエス・キリストの名によっ  
て歩きなさい」とそのように命じました。その神さまのみことばは、ひとりの人を立て、歩かせ、賛美  
に溢れる生涯に彼を導き入れた。ペテロたちは語りました。「悔い改めて本心に立ち返りなさい。神はあな  
205 たを悪から立ち返らせて、祝福にあずからせて下さる。この方には救いがある。」そして、語られるみこと  
ばを信じる者に神さまは本当にそのことをして下さった。

もうひとつのことは、30節のところですが、「そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの  
名によって、しるしと奇跡とを行わせて下さい。」御手を伸ばして癒しをなし、聖なるしもペイエスの名に  
よって、しるしと奇跡とを行わせてください、あなた御自身が、あなたの御手を、いま私たちが置かれて  
210 いる状況の中に伸ばしてください。私たちが向き合っているあの人、この人の状況の中に、あなた御自身

が御手を伸ばしてください。そして、あなたが触れてください。そしてしるしと奇跡とを行ってください。

「しるし」それは本当にイエスさまこそが救い主だ、ということを実証するそのことが、そこで起こってくる。これは神さまを賛美するしかないという、そういう事柄がひとりの人の生涯の中に起こっていくように。「奇跡」とありますけれども、その、…新改訳や新共同訳では「不思議」とか、「不思議な業」というふうに訳されていますけれども、「不思議」という言葉ですよね。「不思議」…あの、…英語では「wonder」というわけですが、神さまがくださる、神さまがこのことをしてくださったとしか言いようのないような不思議、もう、え目ん玉がまん丸く見開いてしまうような、「えええええっ!？」というような神さまの不思議を、どうぞ行ってください。「wonder」、神さまの不思議を、「wonder」がいっぱい「wonderful」って、ワンダフルっていうわけですが、神さまの素晴らしい御業を、神さまの不思議を、「どうぞ、行ってください」。あの美しの門で、40年間歩いたことがなかった男に、「私にあるものを上げよう」と言って、「ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」というふうに言った時に、彼の名をその男が信じた時に、彼は、ほんとうに、彼の上に、癒しとしるしと不思議とが起こった。人々の期待や計算、常識、経験則、そんなものを全く吹き飛ばしてしまうような神さまの御業がそこに起こった。

神さま、私に、大胆にみことばを語らせてください。そして、あなたが御手を伸ばして、癒しをなし、そして、しるしと奇跡とを行わせてください。あなたしかお出来にならないところの、あなたの御業を、あなたが御手を伸ばして、してください。あなたは今も、今この21世紀になったとしても、この日本においても、あなたの御手を伸ばすことができるはずではありませんか。神さま、どうぞ、あなたの御手を伸ばして、私たちに、私たちの教会に、この国に、あなたが触れてください。

みなさん、私たちはほんとうに知りたと思います。私たちの語るみことばを聞いて信じる者たちのうちに不思議が起こっていく。あの美しの門、門のところに起こったことは多くの人を驚かせました。「美しの門」って、ユダヤ人が必ず通る門で、その男というのは本当に有名人。そして、彼は毎日毎日、みじめな顔をして、そして「右や左の旦那様、憐れな乞食でございます。どうぞお恵みを…」ってやってる。できるだけみじめな顔をしてやらないといけない、ちょっとでも自分が笑っているような顔を見せたら、人々からの実入りが少なくなるかもしれない。どんなに自分が不幸か、ということをしてできるだけ効果的にアピールしないといけない。彼の顔には本当に自分が不幸だという悲しみの皺がしっかりと刻まれてしまったでしょう。でも、「ナザレ人イエスの名によって歩きなさい」という声を聞いて、彼が信仰をもって、そして立ち上がった時に、皺は皺のままでしょうけれど、その悲しい、辛い、本当に私は不幸だという皺をそのまま残したままで、彼が喜びながら躍りながら神さまを賛美して、ペテロやヨハネと一緒に宮の中に入って行く。

みなさん、神さまは、同じようなことを今もしてくださらないだろうか。悲しい顔をして、それは表面的にそういう悲しい顔をにじませながら歩んでいる人たちもいるでしょうけれども、表面的には明るい顔をしながら心の中に多くの皺を蓄えて歩んでいるそういう人たちがイエスさまに出会って、神さまを讃える人に変えられていく、そういう奇跡が、今も起こる。このひとりの男が、イエスさまを信じて立ち上がって歩き出した、ということを通して、その日五千人の人たちがイエスさまを信じたこと、聖書は言っています。五千人の人たちがペテロの説教を最初に聴いて、伝道集會に五千人の人たちが、…の人たちに対して語っていたらその人たちが回心した、というよりも、ひとりの人が救われたことを通してそのことが起こった。ひとりの人が、ほんとうに変えられていくという、その神さまの奇跡を、神さまは今も私たちの教会の中にしてくださる。それは「救われる」というだけじゃない、教会の中で長く歩んでいる、でも、いろんな問題を抱えている、教会を引っ掻き回してばかりいるような人たち…でも、そういう人たちが、みことばは本当にその人たちの心に届いて、みことばを本当に受けとめる時に、その人も変えられるって、信じませんか。知ってください。彼らが心をついに合わせて祈った時に、何が起こったか。これ、31節のところですが、「彼らが祈り終わると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆

に神の言を語り出した。」彼らが祈り終わると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神のことばを語り出した。教会に既に聖霊は注がれていました。でも、この時に、この集まったクリスチャンたちの祈りに応えて、神さまはもう一度新たな御霊の注ぎを与えてくださった。そしてその時に、そこに集まっていた人たちは大胆にみことばを語り出した。

みなさん、私たちを大胆にさせるのは何か。私たちが本当に人々に届く言葉を語るができるようにさせるって何か。私たちが神さまに信頼して、神さまに期待して歩みだすために、私たちが大胆にみことばを語るができるために、何が私たちに必要か。そして神さまは私たちに、そのために何を与えようとしておられるか。それは、私たちが、「いや、今まではちょっと中途半端な、気合が足りなかったから、気持ちがちよっと足りなかったから、これからはやっぱり気合を入れて、今年は頑張ろう」っていう、そういうことではなくて、それも尊いかも知れないけれど、あの最初の日、弟子たちを揺り動かした御霊を、私たちがきよめられた時に神さまが注いでくださった御霊を、もう一度、このところに注いでいただきたい。私たちは、リバイバルの記憶、といいましょうか、直接経験したことではないけれど、何回も、神さまの油注ぎをいただいて、教会が刷新されて、というその記憶の中にいる教団です。昔話じゃない。今も聖霊がここに注がれて、いや、神さまは喜んで聖霊を注いでくださって、私たちを大胆に福音を語る者としてくださる。この時に、弟子たちが、教会の人たちが集まって、そこで声を一つにして、心を一つにして、神さまの前に祈ったように、この夜、私たちは祈りたいと思う。私たちのうちに不信仰は無かったか。私たちの内に、神さまの前に、神さまの御業を妨げるような、私たちに大胆さを失わせてしまうような罪は無かっただろうか。不信仰は無かっただろうか。いつの間にか、自分は独りぼっちだという思いになったり、誰かを独りぼっちにさせてしまったりしている、誰かが独りぼっちであることを知りながら見て見ぬふりをしていることは無かっただろうか。私たちは神さまの前に悔い改めるべきことは悔い改めて、でも、もう一度、神さまの前に、みことばを大胆に語る集団にさせていただきたい。ホーリネス教団がそうでなかったら、「ホーリネス教団」って何なんだ？って。

恵みの座を開きたいと思います。前のほうにどうぞ皆さん、遠慮なく出てきてくださって、祈りましょう。みんなで祈りましょう。最初の時に教会の中でそうであったように、今。…「賛美をしながら前に出てきてください」ってやりませんから、どうぞ前に出てきてください。そして祈りましょう。そして、「神さま、私が本当に思い切って大胆にみことばを語るができるようにさせてください」という求めをもって、どうぞ前にお進みください。そして祈りたいと思う。どうぞ皆さん、あの一、遠慮しないで前のほうに進み出て、祈りましょう。最初の日、教会がそうであったように、心を一つにして、神さまの前に祈りたいと思う。みんなが馬鹿にしているんです。「教会が何だ？」って。「教会が私たちに何を言うんだ？」って言ってる。「教会で何がもらえるんですか？」「教会はどんなメッセージを私たちに伝えてくれるんですか？」「教会のメッセージが私たちにどんな関係がありますか？」…私たちは思い切って大胆にこの福音を語りたい。どうぞ前にお進みください。そして、ほんとに神さまの前に祈りたい。もう一度御霊の注ぎを与えてください、最初の日、そうであったように、どうぞ私の上に御霊を注いでください。いや、この群れの上に、あなたの御霊を注いでください。そして私たちが、この集団が、思い切って大胆に福音を語るどころの群れとなることができるように、神さま、どうぞ御霊を注いでください。あの使徒行伝 2 章に起こったことが、4 章に起こったことが、今日もここに起こるように。神さまの憐れみを求めて祈ろうではありませんか。みなさん、どうぞ一緒に祈りましょう。その席に座ったままでもけっこうです。どうぞ、でも、神さまが示しておられる方は、どうぞ前のほうに進み出て祈りましょう。どうぞ声をあげて祈ってください。

神さま、どうぞあなたが憐れんでください。どうぞあなたが祝福してください。この群れをほんとうに憐れんでくださいますて、もう一度この群れが、神さま、あなたの素晴らしいみことばを、これを信じた

295 らその人の生涯が変わっていくという、そのみことばを大胆に語るができるように、どうぞ私たちを変えてください。神さま、あなたの御手を伸ばして、癒しを行わせ、しるしと奇跡と不思議とを行わせてください。あなたの御手を伸ばして、どうすることもできない、困っている、行き詰っている、そういう人たちに、神さま、あなたの生けるみことばを語らせてください。その人の生涯が変わっていく、教会の外にいる人たちだけではない、教会の中において本当にさまざまな困難の中にあるそういう人たちのために、

300 あなたがどうぞ働いてくださるように、どうぞ導いてくださるように、どうぞ祝福してくださるように、心からお願いをいたします。神さまがどうぞ働いてください。どうぞあなたが働いてください。あなたの栄光を顕してください。あなたの油注ぎをどうぞ与えてください。あなたが届いてください。あなたの恵みを注いでください。主よ、あなたがどうぞ導いてくださいますことをお願いいたします。あなたがどうぞ立ち上がってください。あなたがどうぞ導いてください。最初の日が起こったことを、あなたがもう一度、

305 ここで行ってくださるように。思い切って大胆に、神さま、確信をもって、喜びをもって、自由の霊をもって、神さま、あなたの福音を語らせて下さい。神さま、そのことができたなら、ほかのことは大した問題ではない。大した問題ではない。神さま、本当に私たちが思い切って大胆にこの福音を語るができるように、それを妨げるような、妨げさせるような、それができなくさしてしまうような、そういう罪や汚れや、神さま、不信仰や、そのようなものから私たちをきよめてください。私たちの語る言葉と私たちの生き方が本当に一つになっていることができるように、

310 どうぞあなたが導いてくださいますことをお願いいたします。どうぞあなたが導いてください。どうぞあなたが祝福してください。どうぞあなたが支えてください。あなたがどうぞ届いてくださいますことをお願いいたします。……神さまがどうか働いてください。あなたがどうか導いてください。。。どうぞお願いをいたします。どうぞ、あなたが。。。どうぞあなたが届いてください。どうぞ。。。あなたが祝福してください。。。このところに、このところに、御霊を注いでください。あなたには出来ないはずがありません。求める者に聖霊をくださらないことがあろうかとおっしゃったお言葉が。。。このところに働いてくださいますことをお願い申し上げます。どうぞあなたが立ち上がって、あなたの御業を行ってくださいますようお願いをいたします。あなたがどうぞ届いてください。お願いをいたします、主よ…あなたがこの群れを祝福してください。どうぞあなたが導いてください。…お願いします……